

主 題：福音宣教の喜び②

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章15－18節

テーマ：神は神の主権と計画によって福音宣教の働きをされる

きょうともに神を礼拝できることを心から感謝します。

どうぞピリピ人への手紙1章をお開きください。本日の聖書箇所はピリピ1：15－18です。しかし、全体の文脈を知るために12－18節を通してお読みしたいと思います。

ピリピ1：12－18

「:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってみたいと思います。:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。」

さて前回、私たちはピリピ1章からパウロの投獄について見ました。以前にもお話ししたように、このピリピ1章の中には、パウロの投獄、パウロの反対者たちがいたこと、そしてパウロの裁判が待ち受けていて、パウロが死ぬかもしれないということについて書かれています。パウロが一般的には喜ぶことが難しい状況の中で、このピリピ人への手紙を書いたことがわかります。しかし、前回見たように、パウロが投獄されたことは福音宣教の妨げにはなりません。かえって神が福音を伝える機会とされたということを見てきました。パウロは犯罪を犯して捕まったというのではなく、彼はイエス・キリストに仕え、福音を伝えたゆえに牢屋に入れられた。イエス・キリストとはどんなお方なのだと、カイザルの家——公務員のようなローマ皇帝に仕える人たち、ローマ皇帝の親衛隊たちにまで知れ渡ることとなったのです。神がこのようにお用いになりました。またそれだけではなく、多くの聖徒に確信が与えられ、聖徒たち、クリスチャンによって福音が伝えられたことをパウロはあかししました。なぜならパウロの投獄によって、福音宣教が閉ざされたのではなく、神がますますお用いになって、ローマの親衛隊やいろいろな人たちに福音が伝わったことを目の当たりにして、喜んで彼は伝えようとしたのです。神は、パウロの投獄を福音宣教の大切な機会としてお用いになりました。神はその主権と計画によって、福音宣教の働きを確かになされたのです。

さて、今回の15－18節のテキストの中では、パウロの教えに対して、パウロの立場に対して反対する人たちがいたことが書かれています。皆さんは、毎日の中で、周囲におられる人たちとの人間関係に難しさを覚えたり、問題だと感じるようなことはなかったでしょうか？就職して働く中でも、多くの問題は、人間関係から起こっているのが事実です。また、家庭にあっても、人間関係というのは、私たちの心に大きな影響をもたらします。厚生労働省のデータによると、新型コロナウイルスの感染症で、自宅待機の時間が長かった時期に、人間関係のストレスもあって、残念なことに自殺をする人の割合が極端に増加したことが知られています。特に女性の自殺率は、例年減少傾向にあったのに対して、14.5%以上に増えたという報告があります。家庭やいろいろな人間関係の中で、男性も女性もストレスを

覚え、喜びを失ってしまったのです。私たちが家庭の中で、職場で、学校で、または教会で、多くの人に接する中で、その人間関係は私たちの心の喜びを失わせる要因となったり、問題を抱えることとなってしまうことが実際にあります。パウロは主イエス・キリストの福音を宣べ伝え、そのために投獄されることになりました。そのパウロの福音宣教に対して、反対する立場を取る人がいたことを聖書は明らかにしています。この人々は、確かに主イエス・キリストの福音を語り伝えたのですが、問題はそのメッセージではなく、伝道の動機にありました。皆さんが神に熱心に仕え、神様に喜ばれると思う最善を周りの人たちになしていく中で、もしあなたの働きをだれかが強く否定し、受け入れようとしないうことがあったら、どんな気持ちになってしまうでしょうか？落ち込んでしまったり、悲しい気持ちになったり、喜びを失ってしまうことにはならないでしょうか？きょうのテキストで私たちが知らされるのは、まだ神様のことを知らない未信者が理解しなかったり、パウロの働きを受け入れてくれないというのではなく、同じように主イエス・キリストの救いを受け入れて、従っていこうとするクリスチャンの中に、パウロが使徒であることを認めようとしなかったり、パウロの働きを不当に評価したり、敵対する人たちがいたということです。どれほどパウロの心の痛みは強いものだったのでしょうか？しかし、パウロはそのような反対者がいたにもかかわらず、神にあって福音宣教を喜びとすることができました。彼は喜んでこの手紙を書いたのです。

きょうはまず福音宣教の動機として、二つのグループの人たちがいたことを聖書から見たいと考えています。そしてその次に、パウロがピリピの人々に伝えた宣教の喜びについてご一緒に見ていくこととしましょう。

A. 福音宣教の動機による二つのグループ 15-17節

さて、ピリピ1：15-17には、福音宣教の動機による二つのグループがあったことをパウロが明らかにしています。

1. パウロに対するねたみ、争い、党派心によるグループ

まず一つ目のグループは、パウロに対するねたみ、争い、党派心をもって福音宣教をしていたグループです。もう一度15-17節をお読みすると、「:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。」と書かれています。この一つ目のグループは、パウロに対して反対する人々でしたが、主イエス・キリストについての教え、その内容についてはパウロは問題とはしていません。そういうことは書いていません。彼らは律法を守ろうと言ったわけでもなく、割礼を受けなさいと言ったわけでもなかったのです。パウロはこの反対者たちが「キリストを宣べ伝え」と記しています。つまりこの反対者たちが語ったメッセージは、神について、また救い主イエス・キリストについて偽りではなく真実でした。人々が救われるために必要な福音を語り伝えたのです。彼らのメッセージは正しかった。しかし、その福音宣教の動機については、心に問題がありました。このテキストの中で、反対者たちが福音宣教をした動機について三つのことばが出てきます。それは「ねたみ」、「争い」、「党派心」でした。順に、このことについてどういうことが言われているのかを見ていきたいと思えます。

①ねたみによって

まず、彼らが福音宣教した動機は、パウロに対するねたみでした。「ねたみや争いをもって」と書かれています。この「ねたみ」、「ファナス」ということばは、辞書によると、「ねたみ」とか「争い」、「嫉妬」という意味です。つまり他人が所有しているものを奪ってしまおうという欲望です。主イエス・キリストを十字架につけるために引き渡したユダヤ人の群衆や祭司長たちも、この「ねたみ」が動機であったと聖書が明らかにしています。イエス・キリストが神様のことばを伝えられたことをねたんだのです。

そしてそれがユダヤ人の群衆や祭司長たちがイエス・キリストを売り渡し、十字架につけようとした心の動機だったのです。

聖書はこの「ねたみ」が殺意や貪りや欺きと同様に明確な罪であることを教えています。ローマ 1 : 29 - 32 にこのようにあります。「:29 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、:30 そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、:31 わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。:32 彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。」。この反対者たちは、パウロに対してねたみを持ち、嫉妬して、パウロに対抗して福音を語りました。パウロに問題があって、愛の心をもってさとそうとしたわけではないのです。彼らは福音宣教のメッセージをパウロに対するねたみをもって、それを動機として伝えたと、聖書が明確に教えています。

②争いによって

次に、二つ目の「争い」ということばも罪の一つです。この「争い」、「エリス」ということばは、平和を乱す「不和」とか「争い」、「口論」という意味です。つまりこの“エリス”ということばは、敵意を持つことを表します。彼らはパウロに対して敵意、争う心を持ったのです。先ほどお読みしたローマ 1 : 29 - 32 にも「ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者」とあるように、「争い」は聖書が明確に示す罪です。この「争い」についてテキストでは、彼らがどのようにパウロを傷つけたとか、評判を落とすためにした悪いことや言ったことを、パウロは明らかにしていません。しかし、聖書はこの反対する者たちの福音宣教の動機が、パウロに敵対する心であったことを明らかにしているのです。非常に残念なことです。

でもこういう問題は、ほかの教会においてもありました。実際にコリント人への手紙の中では、コリント教会の中で教会のメンバーが、パウロではなく、ほかのリーダーを支持すると言っていた人々のことを明らかに示しています。I コリント 1 : 11 - 12 では次のようにあります。「:11 ……兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、:12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。」。パウロはこのコリントの教会のメンバーに対して、パウロも、アポロも、ペテロ（ケパ）も、神が用いられたしもべであって、神の協力者であり、神に心を向けるようにとコリント教会の人々に教えます。I コリント 3 : 6 - 7 に、「:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。:7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」とあるとおりです。

このピリピ人への手紙の中で、反対者たちはパウロに対して敵意を持っていました。そして悲しいことに、神を愛して純粋な動機から福音宣教をしたのではなく、パウロに対する敵意が福音宣教の動機となっていたということです。

③党派心をもって

第 1 のグループについて書かれている三つ目のことばは、「党派心」です。「党派心」「エリセイア」ということばについて BDAG などの辞書を引いてみると、新約聖書が書かれる以前の文書の中では、アリストテレスという人物の政治学の中にしか見られないことばだということが出てきます。その使われ方は、「不公正な手段で政治的な地位を得ようとする自己追求を表す」とか、「野望」を表すわけです。自分の欲望のために、ほかの人物を追い落とし、その地位を不公平な手段で得ようとする、そのようなことばとして書かれています。また、このことばは、ウィリアム・バークレーという先生がその注解書において、もう少し丁寧に説明をしています。この“エリセイア”ということばは、もともとは悪いことばではなく、お金を得るために働くとか、お金を取って働くという意味のことばでした。しかし、お金のためだけに働く人の動機は低く、そういう人は、自分自身の利益のためだけに働き、自分が進歩し

たり、自分の特権を得るためだけに働こうとしたのです。ほかの人を押しつけてでも自分の得になることをしようとしたのです。その結果、このことばは、職業的な人間や自分を大げさに見せつけるために仕事をする人間を言い表すようになりました。

つまり、自分の欲望や自己中心の目的を達成するためには、どんな手段もいとわない心を言い表すのです。聖書のほかの箇所では、このことばは「敵対心」とか「自己中心」と訳されています。ヤコブ 3：14には「敵対心」と訳されています。「しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。」とあります。またピリピ 2：3にもこのことばが出てきます。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と。ここでは「自己中心」と訳されています。つまり、この反対者たちが福音宣教した動機は、自己中心的な目的のためであり、パウロの使徒としての地位や働きを認めないで敵対する心をもって、福音を伝えようとしたということがわかるのです。

彼らはなぜねたみや争い、党派心を持ったのでしょうか？聖書には彼らがどうしてパウロに対してねたみや争いや党派心を持っていたのか、詳しくは書かれていません。しかし、恐らく福音宣教していたリーダーのところにパウロが来て、福音を伝えた時に多くの人たちがパウロを支持し、パウロの教えに耳を傾けたのでしょう。人々の心が以前にいたリーダーから離れたのです。または、余りにもパウロに注目が集まる余り、そのリーダーたちの立場は非常に弱いものになったということが考えられます。いずれにしても、この反対者たちはパウロが投獄されて牢屋にいる間、パウロではなく、自分の働きが認められ、自分こそがリーダーでありたいと願ったのです。だからこそ、彼らはねたみや争いや党派心という自己中心的な動機を持って、福音宣教をしてしまったのです。その結果として、彼らのしたことは投獄されているパウロをさらに苦しめることになったのです。残念ですが、これが第1のグループが福音宣教をした心の動機でした。

2. 神とパウロへの愛に基づくグループ

さて次に、パウロは二つ目のグループがいることを記しています。この人たちは、第1のグループと全く異なります。この人たちは、神への愛とパウロへの愛に基づく動機で福音を宣教したグループです。この人々が福音宣教をした動機について、「善意をもって」と「愛をもって」という二つのことばをもって聖書は説明しています。

①善意をもって

まず、この「善意をもって」ということばは“エウドキア”という「人に対する良い心」、人に対して良い心をもって何かをするということで、「好意」とか「善意」と訳されます。ほかに聖書で使われている箇所が幾つかあります。例えばピリピ 2：13でも使われています。そこには「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」と訳されています。つまり神が、聖徒であるあなたの心のうちに好意、善意をもってやりたいという願いを起こさせ、また、神があなたにそのことを行わせてくださるということです。この人々はパウロに対して、また神に対して好意をもって、また善意から福音を宣教したい、宣べ伝えたいと願ったのです。彼らがキリストを伝えるその心は善意からでした。

②愛をもって

また、二つ目に「愛をもって」と書かれています。この「愛」というのは、アガペーの愛です。原語も“アガペー”です。つまり友人や夫婦の中にある人間的な愛ではなく、神が私たち人間のために救い主、主イエス・キリストをお与えくださり、示してくださった愛です。神の愛は永遠に変わらず、自発的に、犠牲的に私たちと与えられました。イエス・キリストが十字架につき、その死と復活をもって私たちに救いを与えてくださいました。それを通して、私たちに愛がわかったのです。そしてこの神の愛は信じ、救われた私たち聖徒のうちに、聖霊によって与えられます。なぜなら、私たちの信仰が成長し、

御霊の実によって満たされるならば、この愛というのは御霊の実であるからです。聖徒ひとりひとりの信仰が成長し、キリストに似たものに変えられ、その心の愛が福音を伝えたいという動機となって、周りの人たちに福音を語るのです。

事実、パウロはこのピリピ1：9で、ピリピの教会の人たちが福音を伝えたのも愛であったことを明らかにしています。ここでパウロは「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、」と言います。ピリピの教会の人たちも救われたときからどんどん成長し、福音を伝えてきました。彼らが福音を語り伝えた動機は愛でした。神を愛し、人々を愛する愛のゆえに、彼らは喜んで福音を伝えたのです。反対する人たちがいる中であっても、迫害があっても、彼らは福音を伝えたのです。この二つ目のグループの人たちの特徴は、救ってくださった神を愛し、またパウロを愛するゆえに福音を宣教し、パウロが福音を弁証するために立てられた人物であり、使徒であることを認め、パウロを愛したのです。

3. 福音宣教を喜んだパウロの模範 18節

さて、今までのところを確認してみましょう。パウロは周りにいた福音宣教をしている聖徒たちの中で、15－17節の中で二つのグループの人たちがいることを明確にしました。一つのグループは、パウロに対する反対者でした。そしてもう一つのグループは、パウロのことを愛し、神を愛して福音を宣べ伝える人々でした。反対者たちは投獄されているパウロにとっては苦しみを与えるものでした。しかし、パウロはこの状況の中で喜ぶことができました。パウロが18節で記しているのはそのことなのです。そこに書かれているのは、福音宣教を喜びとしたパウロの模範です。18節「すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。」とあります。パウロはキリストが宣べ伝えられていることを喜んだと記しています。反対者がいながら、投獄されている中で、パウロはどうして喜ぶことができたのでしょうか？パウロは、反対する人がいたことや彼らが党派心をもって福音宣教している心の動機を喜んだのでもなく、福音宣教がなされているというその事実を喜んだのです。パウロは、神がどのように働きをされているかについて考えています。そして神が反対者の働きも、また、愛をもって、善意をもってキリストを伝える人々の働きも、そのすべてを福音宣教のために用いておられることに目をとめました。ですから、「見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって」、このことをパウロは喜ぶと記したのです。

神の主権とご計画：

神はすべてを計画し、主権をもって働きをなしておられます。パウロはその神の働きに信頼し、その神に期待し、感謝しました。神の主権とご計画のもとで、パウロに対する迫害や投獄をも福音の前進のために用いられました。そしてここでは、パウロに対する反対者がいたにもかかわらず、神はあらゆる仕方でもキリストが宣べ伝えられることをよしとされたということを聖書が記しています。パウロにとっては、主キリスト・イエスがはっきりと伝えられることこそが最大の関心でした。パウロにとって、神を愛する多くの聖徒たちにとって、救い主、主イエス・キリストがすべてであったということです。そのキリストのすばらしさが伝えられることを願ったのです。18節の後に続く19節の前に「というのは」とか「なぜなら」という接続詞の後で、20節以降は続くのです。20－21節に「:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と書いています。パウロにとっては、主イエス・キリストがくっきり、はっきり、しっかりと伝わる、ありありとキリストのすばらしさが宣べ伝えられていること、この福音宣教こそが願いでした。人生のすべてでした。ですから、反対者がいたにしても、神がそのすべてを通

して、福音の前進のために用いておられることを喜ぶことができました。これが、聖書が私たちに示してくれているパウロの置かれた状況でした。

さて、私たち自身の心の動機や思いはどうでしょう？皆さんが今置かれているところ——家庭にあって、職場にあって、家族や親族、友人たちにしようとしている伝道や、教会における奉仕、またその働きすべてにおいて、心の動機はいかがでしょうか？神は私たちの心のすべてをご存じです。主は心の秘密を知っておられ、また神は私たちの心をいつもごらんになっておられます。あなたに与えられた救いの喜びや感謝、神への愛が福音宣教の、また奉仕の働きの動機でしょうか？もちろん、きっとあなたは、私は神を愛し、兄弟姉妹を愛して働きをなしていますと言われるかもしれませんが。どうか、ますますそのとおりであってください。でも、もし、いや、少し異なる動機や思いが心にあるかもしれないと言うのであれば、どうか立ち止まって、あなたの心の動機を吟味してください。あなたの信仰を吟味してみてください。なぜならことばや態度は周りからわからなくても、神があなたの心をご存じであり、その働きを喜ばれないからです。私たちは素直に認めて悔い改める必要があるかもしれません。あなたの心、あなたの動機はいかがでしょうか——。

これは私たちだけでなく、弟子たちの中でも見られた問題でした。先週、メッセージを通して聞かれた中でも、聖書は十二弟子たちが最後の晩餐の席においてさえ、だれが一番偉いだろうという議論をしていたことを記しています。ルカの福音書22：24には次のようにあります。「また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。」とあります。これからイエス様が十字架にかかれる、その前の晩餐をしようとしている中で、彼らは道を歩いて汚れた足を洗うこともせず、その食卓についたのです。彼らの心にあったのは自分自身のことでした。自分を中心とした考えでした。だからへりくだって、ほかの人の足を洗うことをしなかったのです。当時、ユダヤ人が食卓にコの字型に座って食事をする中であって、みんなの足を洗うのは末席につく者、奴隷の仕事でした。でもご存じのように、ヨハネの福音書13章の中で、主イエス・キリストご自身が愛を示され、弟子たちの足を洗われました。しかし、弟子たちは、だれが一番偉いのだろうということまで心がいっぱいでした。だから、互いに愛すること、喜んで仕えるということができませんでした。彼らの心の中には、神を愛し、兄弟姉妹を愛して仕えるという動機ではなく、自己中心的な思いや願いがあったのです。

でもイエス・キリストは、彼らの足を洗うという模範を示されました。当時の道にはいろいろな動物の糞も落ちていて、ほこりが舞っていて汚れているのです。その弟子たちの足をひとりひとり洗われたのです。その上で、私たちが今月のみことばとして見ているヨハネの福音書13：34-35にこうあります。「：34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。：35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。私たちは今、毎月のみことばとして「互いに愛する」ということを考えています。私たちが神を愛し、お互いに愛し合うことを学び合い、実践しようとしています。ですから、どうか思い返してください。どのようなことばを語っているのか、何をするのかもそうですが、問題は私たちの心です。私たちの心の動機が、主にあって神を愛し、心を尽くし、思いを尽くし、また兄弟姉妹を自発的に、犠牲を払って、実際に愛そうとしているかどうかです。アガペーの愛に示されるように、感情で好き嫌いというのではなく、意思を持ってみずから進んで犠牲を払ってでも喜んで愛そうとしているかどうかです。

また、この愛は、私たちが一致して主の働きをしていくために必要なことです。パウロがピリピ2章の中でも教えています。聖徒が一致するには愛が必要なのです。そこにはパウロが党派心、自己中心、虚栄からではなく、イエス・キリストの模範にならって、謙遜と従順によって生きていくことが教えられています。実際にイエス・キリストの模範は、謙遜と従順を示すものでした。ピリピ2：1-8をお読みします。「：1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わり

があり、愛情とあわれみがあるなら、:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」。ここで聖書は、私たち聖徒には神から与えられている愛があるので、聖徒は同じ心で一致できるということを教えています。日本語の聖書では、「こういうわけですから、もしキリストにあって励ましが」とあると2:1に出てきます。この接続詞は「～があるので」とも訳されるもので、文脈を考えるならば、「私たちにキリストによって励ましがあり、神の愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるので私たちは同じことを考え、同じ愛の心をもって一致を保つことができる」と聖書は教えています。

聖書は、「同じことを思う」という動詞を何度も繰り返しています。自己中心や党派心や虚栄、ありもしない自分を偉いかのように見せかけるというようなことをしないで、それが妨げになるのです。きょう一緒に見た党派心がそうです。でもそうではなく、主イエス・キリストの模範にならって、私たちが謙虚に、また従順に父なる神に従っていく、同じことを思い、へりくだって互いに人を自分よりもすぐれたものと思うことが一致の秘訣なのです。私たちが一緒に働きをしていくためには、これが必要なのです。聖書は、イエス・キリストの模範を示してくれました。パウロがこの一致を保つために、私たちが愛をもって互いに仕え合っていくために必要なことを教えているのです。それは従順であり、謙遜です。主イエス・キリストはご自分を空っぽに「無」にして、つまり神であられるお方なのに、神のあり方を制限されてまで従順に十字架の死にまで従われたということです。神であられるお方が人となられた、その謙遜。そればかりでなく、卑しくされ、十字架の死。捕らえられ殺される奴隷の死。そのような辱めを受けることにも従順に従われ、神のみこころのとおりに従われたのです。それによって私たちの救いが成し遂げられました。イエス・キリストの十字架の死と復活は、私たちの罪の代価として、贖いのために必要でした。それは神の主権とご計画によって私たちに救いが与えられるためでした。

主イエス・キリストの動機はどうだったのでしょうか？ねたみや争いや党派心、自己中心や虚栄はありませんでした。神を愛し、私たちを愛してくださったその愛のゆえに謙遜であり、従順であられたのです。私たちが自分自身の心の動機を吟味する必要があります。そして、もし神に対する愛、また兄弟姉妹に対する善意や愛ではなく、自己中心的な心があるのであれば、私たちはそのことを悔い改める必要があります。主を愛する純真な動機から主にお仕えするという機会を失ってしまうからです。私たちが神を信じる者は、救い主、主イエス・キリストの十字架の死と復活が自分のためであったということのみことばから教えられ、神にあって聖書のことばを信じ、受け入れて救われました。それまでは自己中心や虚栄のために生きるような人生であったかもしれません。私たちが罪のゆえに、自分の欲を神として生きていたのです。しかし、聖書は私たちの罪の代価としてご自身をささげてくださいました主イエス・キリストを、私たちが自分の主として、すべてを捨ててイエス・キリストに従う、イエス・キリストを神とし、唯一まことの神だけを信じ、礼拝し、従う者として生きることを決心させてくれました。今、私たちが礼拝をささげています。

もしこのメッセージを聞いておられる方の中で、まだ自分の罪の救い、神様に対する罪の救いをいただいていない人がいるのであれば、どうかこの聖書の教えている罪からの救いについてみことばを聞いてください。そして単に聞くだけでなく考え、みこころならばあなたの罪を悔い改めて神を信じ、イエス・キリストを主として従う者に変えられることを願ってください。神はあなたが信じたいと願うならば、あなたを救うチャンスを与えてくれます。主イエス・キリストがあなたの罪のために十字架に架か

り、死んで三日目によみがえられたことを通して、あなたに罪からの救いを与えようと神がなさっていることを受け入れてください。

きょう、私たちは福音宣教する二つのグループの動機と、パウロが福音宣教を喜ぶことができたことを見てきました。そしてあなたの心の動機はいかがだったでしょう？あなたは神の前に純粋な、人を愛する愛をもって福音を伝え、また働きをなしているのでしょうか？神は確かに神の主権と計画によって福音宣教の働きをなさるお方です。そして私たち聖徒は、その神の働きをパウロのように信頼することができます。パウロはこの神の働きを知り、また福音宣教を喜ぶことができました。それはパウロが神の栄光を求めて生きていたからです。Ⅱテモテ2：9－10には次のようにあります。「：9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。：10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。」。パウロの願いは人々の救いであり、神の栄光が現されることでした。彼らの働きと福音宣教によって、今の日本においても、世界中にも福音が届けられました。そして、私たちが神を知り、信じるきっかけになったのです。またパウロはコリント教会に対する働きや献金やささまざまな教えの中でも、神の栄光のため、また誠意を現すために、主にあって働きをしたことをあかししています。パウロは神に対して誠意を示し、また人々に対しても誠意を示しました。Ⅱコリント8：19に「……私たちがこの働きをしているのは、主ご自身の栄光のため、また、私たちの誠意を示すためにほかなりません。」とあります。献金を集めに確かに働きをしました。でも、その福音宣教と働きのすべては、神の栄光のためであったことを彼は明らかにしています。私たち自身は神の栄光のために、神のすばらしさを現すことを願って働きをなしているのでしょうか？そして、私たちの毎日の働き、日々を通して、神様の、イエス・キリストのすばらしさが現わされることを願っているのでしょうか？神は確かにその主権と計画によって、私たちを通して福音宣教の働きをなし続けてくださいます。私たちはそのことを神に期待し、また信頼することができます。問題は私たちが自分自身に何ができるか考えるのではなく、私たちが神にあってお用いくださいと、謙虚にへりくだって願うかどうかです。

旧約聖書にあっても、Ⅰサムエル12：24の中でサムエルは次のようなことばを述べています。「ただ、【主】を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。」。イエス・キリストは、私たちのため十字架につき、死んで3日目に復活されたことも見ました。神は私たちに偉大なことをなしてくださいました。罪からの救いです。そして救われるだけでなく、私たちが神とともに生きる者とされ、神を礼拝する者とされ、神のすばらしい救いを、福音を宣べ伝える者とし、その機会をも与えてくださいました。私たちは今週願わないでしょうか？私たちが置かれたところで、主の主権と計画によって神の福音が宣べ伝えられること、私たちの日々を通して、神のすばらしさをあなたが現す機会となしてくださいと、祈らないでしょうか？どうか私たちひとりひとりが主にあって、忠実に、誠実に、神にお仕えすることができますように。また、救いを与えてくださった神を愛し、教会の兄弟姉妹、私たちの周りにいる家族、親族を愛して、喜んでへりくだって仕える者となり、神の福音を喜んで伝え、主の栄光を現すために生きていくことを願っていきましょ